

「違います……音々、感じてなんか……きゃふう！」

真っ赤になって弁明をする音々の花弁に、人差し指が根元まで差しこまれた。昨日初体験をすませたばかりの肉穴は相変わらず狭かったが、大量の愛液のおかげですんなりと入れることができた。

「そっかあ……音々は露出癖があつたんだね。極度の恥ずかしがりも、もしかしたらそんな願望の裏返しだったのかな？」

サドとマゾが紙ひと重であるように、羞恥と露出癖も正反対のようで実は近いものなのかもしれないと勝は思った。

（これなら、案外簡単に音々の恥ずかしがり、治るかもしれないな）

もちろんそれが、これからする行為に対する言いわけであることは勝も重々承知のうえた。

「どれ、音々のオマ×コ、どうなってるのかなー？」

わざと卑語を使って、より音々の羞恥心を煽る。勝は音々の股座に顔を寄せ、じつくりと濡れた陰部を観察しはじめた。

（やっぱ薄いなあ。産毛うぶげと変わらないじゃないか）

低めの肉土手にはほとんど陰毛は生えておらず、ひとつまみの柔らかそうな縮れ毛

があるだけだった。由佳里のヘアも薄い、音々のものは比較にならないほど少なかった。

肉薄な陰唇は色も綺麗なピンク色で、左右対称の美しい形をしていた。少しだけほつれた秘裂からはじつとりと透明な愛液が滲_{にじ}んでいる。

「やああ、息が……ご主人様の息が、音々に当たってるう……ああ、見ないで……お願いです、もうこれ以上は……ああ……っ……」

間近で秘所を覗かれていることが羞恥心を煽り、そしてそれが淫靡_{いんぴ}な快感となって音々の隠された欲望を揺り動かす。開通したばかりの、処女と見まごうばかりの可憐な肉壁が徐々に開きはじめ、粘度を増した秘蜜がとろとろと溢れてくる。

「すごいな、どんどん濡れてくるよ。やっぱり音々は露出狂なんじゃないか？」

「ひいっ！」

露出狂という単語に、音々はビクリと身体を震わせた。それに呼応するように、また蜜の量が増える。

（こりゃすごいな。美沙も似たようなところあるけど、音々はそれ以上かも……）

野外で下半身を丸出しにするという羞恥に加え、恥ずかしい言葉で罵られても感じる音々に、勝もつられるようにして興奮していった。股間の分身はすでに痛いほどに

充血している。

「これだけ濡れてれば大丈夫だよな？」

「え……ほ、本当にこんなところで……こんな格好でっ!?……ああ、イヤ……ダメです、こんなの……こんなのいけません……ううああああっ!!」

一気に奥まで貫かれた音々が悲鳴をあげた。恐れていた痛みはなく、逆に信じられないほどの快感が背中を駆け抜けていく。

「うああ、奥、奥まで届いてる……ああ、ダメです、動かないで……ああ、まだダメ……っ……あつ、はあッ!」

コンクリートの壁に爪を立てながら、音々は次々に襲ってくる甘美な悦びに細い身体を何度も痙攣けいれんさせた。脚にはまったく力が入らず、膝がカクカクと震える。昨夜感じた破瓜はかの痛みが信じられないほど、音々の膣道は完全に勝の肉棒を受け入れていた。「ダメ、変、私、変ですっ……こんな恥ずかしいことしてるのに……ああっ、死にたいくらい恥ずかしいのに、身体が勝手に感じちゃうう……アア、ご主人様、ご主人様あ……っ!」

「なんだ、二回目でもう音々はイキそうなのか？ 外で後ろから突かれて感じてるんだな？」



「うああっ、違う、違うんです！　音々、感じてなんか……ああ、深い……ご主人様の、深すぎますうう!!」

ずるずると崩れそうになる音々の上半身を抱きあげるようにしながら、勝が腰を振りつづける。エプロンドレスの上から成長途上の乳房を揉みながら、微妙に角度を変えて露出メイドの膣肉を抉っていく。

（ん？　誰かいるのか？）

物音がしたような気がして、勝はそちらに顔だけに向けてみた。こちらをじっと見ている二つの目があった。別にこちらに来るような気配はなかったので、

（へへ、面白そうだから、ちよつと使ってみようかな）

「音々、こつちを見ている人がいるよ」

「え……そ、そんなっ……ああ、イヤ、ご主人様、もう許して！　お願いです、こんなところ見られたら……ああ、あッ、はあッ！」

こちらを見ている存在を知らせた途端、音々の膣襞がすさまじく収縮をはじめた。ただでさえ狭い膣道がさらに窄まり、ペニスを圧迫してくる。しかもただ締めつけるだけではなく、勃起を膣奥へ引きこむように蠢くのだ。

（おわっ、すげえ！　こ、こんなの初めてだ！）